

子どもの貧困対策センター「一般財団法人あすのば」設立にあたって

真心こもった募金で誕生する「あすのば」を大きく育てましょう 代表理事 小河光治



4月28日の「子どもの貧困対策センター設立準備会」発足の記者発表後、50日ほどの間に846人もの方々に設立賛同人になっていただきました。1口千円のファウンダー(創設寄付者)募金には、1,109万8,110円ものご寄付をいただきました。また、フェイスブックでは3,026人もの方から「いいね!」をいただきました(6月17日現在)。心からお礼申し上げます。

おかげさまで、「子どもの貧困対策法」が成立して満2年になる6月19日に子どもの貧困対策センター「一般財団法人あすのば」が誕生します。短期間に大きなご支援が集まったのには、理由があります。5月5日の子どもの日から、山手線をぐるり一周する街頭募金を学生が実施しています。名古屋でも街頭募金を3日間行い、札幌では、講演会を開いて多くのご寄付をいただきました。温かさがいっぱいつまった募金で財団法人が設立できることを心からうれしく思います。重ね重ねお礼申し上げます。

この瞬間も、どんなに苦しくても、つらくても、悲しくても、声をあげることができない。将来の夢や希望も持てず、「ひとりぼっちだ」とふさぎ込んでいる子どもたちが、あちこちにいます。子どもの頃の私も同じような経験をしました。温かい支えがあったからこそ、いまの幸せな人生があります。

肌で痛みを感じてきた子どもたちをしっかりと支えて社会みんなで温かく育めば、貧困の連鎖を断ち切るだけではなく、自分だけではなく周囲の人も幸せにできる人に育つと確信しています。

誕生したばかりの「あすのば」が大きく成長し、一人でも多くの子どもたちの希望あふれる明日につながるように、引き続き温かいご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

おがわ・こうじ 1965年、愛知県小牧市生まれ。8歳の誕生日に父が交通事故にあい7年間の闘病の末、他界。交通遺児育英会奨学金で高校・大学へ進学。卒業後、あしなが育英会に勤務。神戸レインボーハウス館長、奨学課長などを務め、今年3月に退職。子どもの貧困対策センター設立準備会代表に就任。

子どもたちが安心して豊かに育つ社会に今変えましょう 副代表・理事 村井琢哉



日本社会の未来はどうなっていくのか。今の現状であっても、少子高齢化、子どもの貧困率が過去最悪と言われていています。この人口減少社会において、子どもの貧困状態であるということは、日本の将来の姿がますます「貧困」であることを示しています。

「山科醍醐こどものひろば」で子どもたちと晩ご飯を食べはじめて5年。地域のなかで出会った子どもたちの声を聞きながらはじめた活動が拡がり、いま各地域でも多くのアクションがうまれています。一方で、そのアクションを支える機能も制度もありません。さらに、現場で見えてきた問題やニーズを政策に反映していく機能も十分とは言えません。さらに今後学校や地域の公共機関、福祉施設などとも連携し、ひとりでも多くの子ども、家族と関われる活動が求められますが、その支援体制づくりをサポートできる仕組みもありません。そのような子どもの貧困対策の萌芽期にこそ、これまでの実践を伝え、活動者を通じて多くの子どもたちや家族の声を集め、社会に伝え、すべての子どもたちがよりよく安心して、豊かに育つことができる社会にしていくことだと思います。

これまでも子どもの貧困という問題解決のために多くの方々が実践を生み出し、またつながりアクションをされてきました。その開拓された土壌に今たくさん芽が出ています。この「あすのば」を通じ、これからこの芽が素敵な花をさかせ、実をつけ、多くの子どもたちの笑顔が溢れるように、栄養を送り届けることができるように頑張っていきたいと思います。

むらい・たくや 特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば理事長。関西学院大学人間福祉研究科修了。社会福祉士。学生時代から活動に参画。大学院修了後、京こどものひろばの活動に関わり、副理事長、事務局長を歴任し、現職。主な著書(共著):『子どもたちとつくる貧困とひとりぼっちのないまち』(2013)。

<理事メッセージ>

内山田のぞみ キッズドア元インターン、慶應義塾大学4年



子どもの貧困問題で、一番問題なのは、子どもが大きな夢や目標を持ってないことだと私は思います。朝から晩まで働いている親を見て、自分の家の状況を知り、できるだけ親に迷惑はかけてはいけないと感じ、挑戦することを諦めてしまいます。

私も、高校受験のときにはそうでした。都立高校に合格するために、ランクを下げて安全圏の高校を受験しました。でも、大学受験で私はチャレンジすることの大切さに気づき、「模試で E 判定」しかとれなかった慶應大に合格しました。私の人生で初めての挑戦でした。大学で私の人生は大きく変わりました。

私は、どんな状況にある子どもも困難にチャレンジする権利を保障する社会を実現しなければならないと思います。あすのばの活動を通して、子どもたちにチャレンジすることの大切さを伝えていきたいです。

うちやまだ・のぞみ 4歳で父と離婚し、母と二人で都営住宅に在住。高校から塾代と大学の学費のためにアルバイトをしている。大学3年のときキッズドアで1年間インターンを務める。

久波孝典 チャンス・フォー・チルドレンインターン、東洋大学3年



「子ども」は様々な物事に敏感に反応し、影響を受けながら、それらを経験として成長していきます。身近な人からの愛情を感じた経験があれば、「人に愛情を与えることのできる人間」に、生きていく上での壁を乗り越えた経験があれば、「自信を持って行動のできる人間」に…。

私自身は、幼少期に施設に入所せざるを得ない状況となり、それまでの人生経験だけでは、人に愛情を与えることも、自身を持って行動することもできない人間になっていたと思います。しかし、施設で暮らす中で職員からの愛情を感じながら過ごすことができたり、一度は無理だと諦めた進学をたくさんの方の力を借りて実現することができたりといった経験をする中で、以前より格段にそうした成長を遂げることができました。課題を抱える子どもたちも、社会の力で各々が花開いた人間へと成長することができます。より多くの子どもたちへ手を差し伸べることのできる団体になるよう努めます。

くば・たかのり 東京都出身。父親の自殺と母親からの虐待の影響で、小学5年生の時に児童養護施設へ入所。高校卒業 までを過ごした後、東洋大学に進学、現在は公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンでインターンとして働く。

高橋遼平 STOP!子どもの貧困東京ユースミーティング実行委員長、中央大学4年



私がすべきことは、父がやり遂げられなかったことをすること、すなわち、社会に問題を知ってもらうことだと思い、活動してきました。父のように誰かのために自分を犠牲にする人は、それで家族を救えるかもしれませぬ。しかし、それでは、当事者が問題を抱え込んでしまうことで問題が社会に伝わりません。結果的に、同じ社会的な状況を残し、次の世代に同じような自己犠牲を強いることになってしまいます。

だからこそ、いま子どものために無理をしているお父さん、お母さん、そして、家族に負担をかけまいと一人でつらさを耐えている子どもたちとともに声を上げたいのです。「家族でなんとかできないなら、あきらめなさい」という心に染み付いた考えを振り払い、自分のためにも、そして、将来同じつらさを抱えてしまうであろう次の世代のためにも、いま社会とともに変わっていききたいのです。センターがあれば、変えていける、変わ

れると確信しています。

たかはし・りょうへい 北海道出身。中学1年の秋に父が会社の借金を自分の生命保険金で支払おうと自殺。しかし、自殺の免責期間で保険金がおらず、母が自己破産。困窮状態に。内閣府子どもの貧困対策に関する検討会に参加。

宮本みち子 放送大学副学長、子どもの貧困対策に関する検討会座長



今でも『貧しい子どもがいるのか』という人は少なくありません。貧しいことは偏在しているために、見ないまま日常生活を送ることができる人もいるからでしょう。バブル崩壊後、子どもの貧困率は上昇を続けいまや6人に1人が貧困状態で育っています。

そのなかで、ようやく子どもの貧困対策法が施行され、子どもの貧困対策は社会の責任だということが確認されたこととなります。国や地方自治体はこのことをしっかりと自覚して取り組みを進めてほしいと思います。しかし、私たち一人一人が、自分に何ができるか考える姿勢を持たなければ、貧困のなかで育つ子どもたちの複合的な困難を取り除くことはできません。子どもは社会の夢と希望です。このたび、一般財団法人あすのぼが設立されたことは、貧困対策に 取り組み人々の輪を広げ、不幸な子どもたちを生まないための取り組みがスタートすることを意味しています。

みやもと・みちこ 千葉大学教育学部教授を経て現職、社会学博士。労働政策審議会委員、社会保障審議会委員、子ども・若者育成支援推進点検・評価会議座長、子どもの貧困対策に関する検討会座長などを歴任。

<監事メッセージ>

渥美まゆみ 税理士



かつて私も母子家庭で育ちましたが、多くの善意の方々に支えられ社会に出ることができました。感謝の気持ちは今もずっと変わることはありません。

辛い思いをしている子どもたちの声にならない声を受けとめ、どんな環境でも、3度の食事と教育を受け、しっかりと人生を歩んで行ける、そんな社会になることを心から願っています。

小河さんと24年前に出会ったこと、今日ここでスタートに立ち会えることを嬉しく誇りに思います。これからもよろしくお願いします。

あつみ・まゆみ 災害遺児の高校進学をすすめる会（現あしなが育英会）職員を経て、平成7年3月税理士登録。東京都練馬区で税理士事務所を開業。

津久井進 弁護士



私たちの憲法は、一人ひとりを大切にすることが最も重要だと記し、それを妨げる「欠乏」つまり貧困から免れる権利があると宣言しています。子どもは夢を持って生まれてきます。子どもたちには、その夢をふくらませ、実現できるように成長を遂げる権利が保障されています。そして私たちには、子どもたちが夢や希望をもって育つことができる社会を創る責任があります。子どもの貧困は夢や希望にとって天敵。ですから、一刻も早く貧困を解消することが、この国や社会の未来に不可欠であり、私たちにとって最も重要な使命なのです。

子どもの貧困対策センター「一般財団法人あすのぼ」の創設は、私たちの社会にとってキラッと輝く希望です。この小さな一歩が、子どもの夢を育てる土壌となり、子どもの貧

困を撲滅する大きな歴史的転機となることを信じています。私は監事という立場から、センターが打ち立てた崇高な使命を実現できるよう後押ししたいと思っています。

つくい・すすむ 阪神・淡路大震災をきっかけに被災者の支援活動や災害復興に関する政策提言に取り組み、弁護士として子どもの権利や貧困問題に関する法律実務にかかわってきた。公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン監事。

＜評議員メッセージ＞

赤石千衣子 しんぐるまざあず・ふおーらむ理事長



子どもの貧困をなくしていくためには、子どもたちが育つ家庭、多くがひとり親、シングルマザーですが、まずはその家庭で子どもと親が安心して生活していけることが大切です。しかし、シングルマザーはがんばってがんばって働いても、低収入でぎりぎりの生活です。ひとり親家庭の貧困率は 54.6%にも上ります。どうしても支えとなる児童扶養手当や子どもの支援の拡充や子育て支援が必要です。しかし、そのためにも、実態を把握し、一般の方たちの理解が広げ、応援してくださる方を広げていきたいと思えます。

子どもたちが犠牲になる事件が後を絶ちません。ほんとうにつらいです。未来ある子どもたちが犠牲にはなりません。これ以上子どもたちが犠牲にしない社会を、つくっていかうではありませんか。

あかいし・ちえこ シングルマザーとして子どもを育てながら、保育士、編集者などで働きひとり親と子どもたちが生き生きらせる社会をめざして活動。ひとり親家庭の支援の在り方に関する専門委員会参加人。

阿部彩 首都大学東京 都市教養学部教授



子どもの貧困は、日本社会が面する最大の危機です。日本の子どもの6人に1人が貧困状態にあります。

すべての子どもが自分を信じ、将来の夢が描けるようにするためには、政府、自治体、企業、民間のさまざまな人々が力を合わせる必要があります。

市民のひとりひとりの力は小さいものかも知れませんが、小さい力が10人、100人、1000人、1万人と集まれば、大きな原動力となっていきます。

「あすのば」が、そのような力を一つに束ねる「場」になっていくことを期待いたします。

あべ・あや 国際連合、海外経済協力基金を経て、1999年より国立社会保障・人口問題研究所。専門は貧困、社会保障。2015年4月より現職。主著に、『子どもの貧困－日本の不公平を考える』（岩波書店）等。

高橋亜美 アフターケア相談所ゆずりは所長



今を生きる子どもたちへ。たくさんの我慢を重ねて生きている君の姿を見過ぎてしまわぬように。君が伝えてくれた「助けて」の声を聞き逃してしまわないように。ひとりぼっちでいる君の手が、誰かの手にあたたかく握られるように君が、安心して「苦しい」と「しんどい」と「助けて」と言える社会に、私たちは変えていくよ。必ず変えていくよ。君のかけがえのない子ども時代を かけがえのない今を守るために出来ること、すべきことを大人たちが力を合わせて全力でやるよ。そして、君に「生まれてよかった、生きていてよか

った」と思ってもらえる社会をつくっていく。君が、今、生きてくれていることをありがとう。心からありがとう。君の存在そのものが未来で、希望で、光です。

たかはし・あみ 1973年生まれ。日本社会事業大学卒業。自立援助ホームのスタッフを経て、2011年、アフターケア相談所ゆずりはの所長に就任。著書に、『愛されなかった私たちが愛を知るまで』（共著、かもがわ出版）等。

徳丸ゆき子 大阪子どもの貧困アクショングループ代表



子どもの貧困対策センターの設立、おめでとうございます。

今回、財団をつくり資金を集められるのですが、それはしんどい状況におかれている子どもたちに対する、人々のあたたかい想いを寄せ集めるといことなんだと思います。

人を自己責任と切り捨てるような冷酷な社会に私はしたくありません。よりしんどい子どもたちに想いやサポートを届け、すべての子どもたちが夢や希望を持てる社会を一緒に実現していきましょう！

とくまる・ゆきこ NPO 法人にて不登校、ひきこもり支援に従事した後、国際協力 NGO に所属。子どもの社会参画、子どもの貧困、東日本大震災復興支援のスタッフを経て、2013 年に大阪子どもの貧困アクショングループを設立。

村上吉宣 宮城県父子の会代表理事、全国父子家庭支援連絡会理事



子どもの貧困対策センターの取り組みが子どもの貧困対策に取り組むシンクタンクとして機能し、「次世代育成を投資」として具体的な提言を発する場となり、貧困の連鎖の結果として「ひとり親」として生きる「貧困の負債」を抱えた「親支援」の必要性にまで言及する機関として存在し続けられるよう期待しています。

私の私見としては困窮する要因を幾つも抱えた家庭には多くの専門機関が関わりチームでアプローチを図る必要があると考えております。必要であろうと考えられるイメージとすると障害者総合支援法に準ずるひとり親家庭総合支援法（仮）のような民間の支援者が指定を受け職業人として業務に取り組んで行けるようになるのが望ましいと考えています。すべての貧困に直面する子どもたちと養育する父・母が希望を持って生きることを選択できるような道筋を提言していく力強い機関となっていくことを期待しております。

むらかみ・よしのぶ 宮城県仙台市在住、2児を育てる父子家庭の父。平成 20 年に宮城県父子の会を発足。父子家庭へ届かなかつた支援制度を拡充させるため社会活動を実践。法改正へと導く。現在、福祉と労働の両面からの提言を実行中。

幸重忠孝 幸重社会福祉士事務所代表、滋賀県スクールソーシャルワーカー。



今回、子どもの貧困対策センターが産学官民様々な立場の人たちの応援のもと立ち上がったことを大変嬉しくまた心強く感じています。私自身はこのセンターの設立理念のひとつ「子どもがセンター」を実現すべく「貧困課題を抱える子どもの声を直接聴くこと、子どもの声が直接届く仕組みを作ること」を中心にソーシャルワーカーとしてこのセンターに協力して

いきます。

また「子どもの貧困対策大綱」で提言されている学校をプラットフォームにした支援を実現するためにスクールソーシャルワーカーをはじめ学校に関わる大人による子どもの貧困課題の発見そして行政機関はもとより地域の力も借りながら子どもとその家族を支える

仕組みづくりを推進するための調査やモデルづくりで協力していきます。

ゆきしげ・ただたか 1973 年生まれ、岡山出身。児童養護施設職員、大学教員を経て山科醍醐こどものひろば理事長時代に地域での子どもの貧困対策事業をはじめ、幸重社会福祉士事務所を立ち上げる。

渡剛 あつとすくーる理事長



僕は未婚の母子家庭で生まれ育ち、今年で 26 歳になります。過去をふりかえればしんどいこともたくさんありましたし、未だに家族のしんどさは残っています。それでも僕は今、多くの人に支えられながらやりたいことを仕事にすることができて、しんどいながらも楽しい日々を送っています。

中高生の頃をふりかえれば「このしんどさに終わりが来ないんじゃないか・・・」と思ったこともありました。そして今、当時の僕みたいに終わりの見えないしんどさに苦しんでいる子どもたちがいます。子どものためにと身を粉にして必死に働く保護者の方々がいます。誰にも相談することができず、1 人で戦う保護者や子どもがいます。そんな親子が安心を感じることができ、生きることを見いだせる社会を創っていく。そのために必要なことをこのセンターが中心となって作り、発信し、広げていくことを願っています！

わたり・つよし 1989 年熊本市生まれ。未婚の母子家庭で育つ。中高生時代に自分自身が苦しんだ経験から、「自分と同じような苦しみを次の世代の子どもたちに残したくない」と思い、大学 3 年次にあつとすくーるを設立。

<職員メッセージ>

村尾政樹 ころから笑い合うためのネットワーク・ここわらねっと設立メンバー



私は 11 歳の時に母親を自殺で亡くし、その後悔や自責の念から”ひとりぼっち”だと思いながら育ってきた経験があります。また、父子家庭といえども決して経済的な余裕はなく、奨学金とアルバイトだけで大学に進学、学生生活を送ってきました。それでも今まで頑張ってきたのは本当に多くの方々から支えていただいたからだと心から感謝しています。

この度、団体設立にあたり初めての、唯一の専従職員となります。今まで受け取ってきたご恩を次の子どもにつなげる「恩送り」として、みなさまからお預かりした温かいお気持ちをしっかり子どもたちへ届けてまいります。そして、みなさまのご期待に応え、更なる子どもの貧困対策の推進に向けて精進してまいります。

子どもの貧困対策は「かわいそうな子どもを救う」ためのものではなく、子どもみんなが、そして、私たちみんながより良く生きていくためのもの。センター設立後も引き続き、よろしく願いいたします。

むらお・まさき 兵庫県神戸市出身。11歳の時に母親を自殺で亡くす。就職しようと商業高校に入るが、同じ境遇の仲間と出会えたことで進学を志す。北海道大学教育学部卒業。学生時代に「ここわらねっと」を設立し、北海道における自殺対策や子どもの貧困対策の推進に従事。